

初代中央気象台長 荒井郁之助

——その青年時代——

堀 内 剛 二

まえがき：——筆者は前に「蓋し筆者をして気象台史に向はしめたそもその始まりは荒井郁之助を傳ずることにあった」と記した。気象台創立 80 年に当り、荒井郁之助傳資料若干を管見することができたので、その略傳の一部、主として青年時代について報告する。関係資料は下記の通りである。

1. 荒井家伝記 荒井郁之助手記
2. 荒井郁之助君墓碑銘 田辺太一撰
3. 西往日録 矢田堀景藏手記

これらはすべて、岡田武松博士並びに三宅泰雄博士の斡旋により、荒井陸男画伯（郁之助令息）にその借覽を許されたものである旨を記し、ここに謝意を表する。

* * * *

荒井郁之助は天保 7 年（1836）4 月 29 日江戸湯島に生まれた。幼名を幾之助に作り、祖父の幼名をとったという。父清兵衛 24 才母千賀 20 才の長子である。

荒井家はもと幕府小普請方で目見以上の家柄。祖父清兵衛は墾齊と号し、墾齊叢書拾余卷（散佚）の著あり。天保 9 年 49 才で歿した。父清兵衛は拔んでられて代官となり、奥州棚倉、甲州市河、奥州桑折及び北関東に相次いで数万石を支配した。同じく学を好み、牧民金鑑（昭和 15 年誠文堂刊、滝川政次郎校訂、香宇叢書、迂軒雜綴等著書百数十卷に及び、惠政を称せられた。香宇迂軒とともにその号である。母千賀は、代官竹垣三右衛門手付元締御普請役格中村程四郎の女。

父清兵衛弟妹に、善四郎、景藏、とき子があって、善四郎以外は後腹である。幾之助幼少にして、善四郎は成瀬を称し、景藏は矢田堀を称し、何れも共に後年幾之助に影響を与えた。なお、とき子は後に坪井信良に嫁し、坪井正五郎を生む。

幾之助の教育は極めて嚴格であって、幕末旗本の子弟一般とは稍異っていたようである。按ずるに、父清兵衛を始め、荒井家好學の故であろうか。12 才で四書五經の素読を終え、続いて、劍術、弓術、馬術、槍術、砲術、と武術修練に寸暇もない日程が組まれている。素読の師は父清兵衛の門下人であり、武術の師は上記の叔父成瀬善四郎が周旋した。また母千賀は「景さん（景藏）は 11 才にて済されたり、本を読まねば人になれぬ」旨諭した由で、嘉永元年（1848）幾之助 13 才の暮の素読吟味の際の言葉である。景藏の養家矢田堀家は御右筆で、弱冠にして昌平校に入り、田辺太一（運舟）塚本恒輔（明毅）と並び三才子を称された。以て幾之助少年時の周辺を覗い得る。

翌嘉永 2 年、14 才の春元服。幾之助を郁之助と改め、顯徳と名乗った。同時に昌平校南樓に通学し、当時論講の会頭であった永井岩之丞（尙志）を始めて見た。傳記に「15 才より 16, 7 才迄は弓馬槍劍砲術の稽古に忙殺其間学問所の論講会読等の外他事なし」と云い、また碑銘に「君夙に家訓を承け、又昌平校に学び、兼ねて武技を嫻ひ、馬上槍を使ふこと其長ずる所なり」とある。

天保より弘化にかけて（1830～47）異国船の來航ようやく繁く、海防の儀起って、実学としての蘭学は兵学の面次第に重要視され始めていた。畜社の獄は華山、長英を捕えたが、一方高島秋帆に西洋砲術の教授を許可しているのが見られる。下って嘉永 6 年（1853）のペリー來航となって、大船製造の禁を解き、講武所を設置し、沿岸警備の台場築造など、ここに時代は急転しようとする。

洋式砲術について云えば、秋帆の江戸での砲術教授許可が天保 13 年（1842）、この頃既に勝麟太郎は蘭学に志して弘化元年（1844）には佐久間象山に洋式砲術を習うに至り、その象山は嘉永元年（1848）洋式大砲を鑄造している。また同年には本邦最初の洋式船舶書である箕作阮甫の「水蒸氣船説略」が現われた。続いて嘉永 3 年（1850）勝は西洋兵式の私塾を開き（当時 28 才）、ペリー來航の同 6 年には江川英龍の蕁山反射炉が起工される。

かかる時代の推移が郁之助の身邊にどのような変化を齎らしたか。

嘉永 6 年の夏（ペリー來航は同年 6 月）、郁之助は砲術に熟中した。「殊に夏季には徳丸の原大森の町打、佃島沖にては合同を打揚る事坏は尤も面白く、何も彼も打忘れてそれのみ掛れる程なりき」こうして強い火薬の激動に耐える修練、火薬、烟りもの、火矢を製造した。武州徳丸原は秋帆が始めて洋式調練を行った所、当時幕府の打揚場であった。

この夏は、また、父清兵衛の支配替で、家族一同奥州桑折へ移転し、郁之助一人江戸に留まって成瀬善四郎方の二階に寓居した。そして程近い田辺家へ温史の会読に通ったが、既にして荷蘭訳書「船舶新篇」を借覽筆写しているのが見られ、「之を讀みて和流砲術の如きは及ばざるものなることを知り」と言っている。また郁之助の砲術の師鶴殿十郎左衛門は講武所の取立に尽力したが、年少子弟に自ら弓術の無用を説き小銃の代るべきを諭した由で、勝麟太郎を招き歩兵調練などを習わせたという。郁之助は勝の鑄造した 13 センチ臼砲を借用、長崎人藤井重作に洋式砲術の正式入門などをした。当時郁之

助 18 才。

ここで筆者は必ずしも時代の影響を強調するものではない。有為の人物にして、その英気多感の青年時代に、何等かの形で時代と関連を持たざるは無いのである。われわれはただ、当時郁之助をめぐる環境が如何に変動しつつあったかを見れば足りる。そしてそれは、幕末という言葉に示される一つの過渡期を意味する。

指摘したいことは、父清兵衛数次の支配替にも、修業時代の郁之助は常に江戸三味線堀の自宅または親戚に預けられ、ほとんど書生に近い生活を送ったことである。これは修学に便であったのみならず、封建的事大主義からの脱却を助けたでもあろうか。たまたま出府の際の儀式だった父の行列を見て、これを気狂いじみたものと評している。

ペリー来航の挿話を附記すると、その再航の安政元年(1854)、応接掛を勤めた在府浦賀奉行伊沢政義は荒井家と交誼があったらしく、その息諺吾は郁之助の知友であって、これにより早くも洋食にパンを食し、葡萄酒シャンペンを飲んでいる。すなわち 参会者の中に、伊沢諺吾、田辺太一、塚本恒輔の名が見える。郁之助の環境はしばしば欧米文化との接触の機を与えた如くであるが、自らもまたあえてこれを拒まなかった。

安政 2 年(1855) 首夏御勘定石神彦五郎長女慶子と結婚、郁之助 20 才。同年 10 月の大地震は家内無事。年末には小十人組番入百俵十人扶持となり、直ちに前記箕作阮甫について蘭語典を学び始めている。かくて郁之助はここにその生涯の一步を進めた。

安政大地震に際し、一方矢田堀家では、景藏養母及び嫡子太郎が死した。景藏は時あたかも海軍傳習所第一期生として勝麟太郎と共に舟行長崎に向って、詳細を聞いたのは長崎着後であった。この時の記録が矢田堀景藏「西往日録」であって、遺憾ながら、傳習中の記事を欠いている。景藏は安政 4 年(1857) 帰府、直ちに新設の築地軍艦操練所教授方頭取被命となった。

郁之助をめぐる知友で上記の長崎海軍傳習に赴いたものは、景藏以外に、前記塚本恒輔、伊沢諺吾があり、後江戸湾脱走を共にする榎本釜次郎、甲賀源吾、沢太郎左衛門がある。なお、ついでながら、蓮舟田辺太一は英語における先学であって、尺振入を啓発して英学に志ざしめたことは、鷗外漁史の「波江抽弁」に記されて人の知る所である。田辺はやがて郁之助の義弟となり、池田筑後守に随行渡欧している。これら青年郁之助の知友はいずれも当時進取的な幕府の俊英であった。

矢田堀景藏の帰府と共に郁之助も航海術を学び、塚本恒輔宅で洋算を習った。築地軍艦操練所の教授方不足を補うため、安政 5 年(1858) 世話心得より教授方出役となったことは自然である。明けて 6 年、実地修業のため朝陽丸で浦賀より下田、清水に至り、戸田を経て東帰。時の朝陽丸船長は勝麟太郎、郁之助の勝に知られた最初である。ちなみに、航海術が気象観測を含んでいたことは言うまでもない。また、当時陸上には既に伊能忠敬による精密な地図があったが、沿岸測量は欠いていた。従って、ペリーの江戸湾測量が幕府を驚愕させたことを思

えば、長崎傳習中既に矢田堀、塚本、小野(友五郎)等が長崎港を測量製図したことは驚ろくに当らぬであろう。そして、万延元年(1860) 第一回遣米使節新見豊前守正興に随行した叔父成瀬善四郎(当時外国奉行支配組頭)の帰朝土産は、製図器具と米国海岸測量報告であった。後年郁之助が開拓使出仕となって北海道を測量したこと、また気象事業にたずさわる機縁となったその地理局測量課入りは、共に必ずしも偶然でない。なお上記使節には咸臨丸が同行し、その船長は勝麟太郎。同船に福沢諭吉のあったことまた周知であり、この鎖国以来最初の海外使節派遣は、新しい時代を予告するものがある。

同じ万延元年 9 月、郁之助は妻お慶を失っている。当時海軍傳習を終えて郁之助宅に寄寓し、共に原書について高等数学を学びつつあった甲賀源吾は、また病妻お慶の看病をもした由で、ここに郁之助、源吾の親交は後の宮古海戦における源吾の戦死に至る。

同年末には江戸内海測量被命で、源吾等と共に城カ島より竹カ岡に航し、翌文久元年製図を終えた。すなわち勝海舟「海軍歴史」に

「万延元申年末より起業して翌文久元年 4 月に成功の江戸湾実測図は操練所教授方小野友五郎、助手傳荒井郁之助、上原七郎、宮永扇三、甲賀源吾等豊田港を測量し、安藤源太郎、野村総右衛門製図す」云々。

同文久元年(1861) 11 月 5 日、鳥羽城主稻垣氏抱医安藤文沢二女とみと婚姻。安藤太郎はその実弟で、郁之助の妹ふみはまた後年安藤に嫁する。

郁之助は、この婚姻直後の 11 月末、帆船千秋丸にて小笠原行を被命した。

この小笠原行は、海防に起因した開拓使水野筑後守忠徳の同島派遣に伴うもので、その乗船咸臨丸には矢田堀景藏が塔乗した。千秋丸は糧食回槽と八丈よりの移民輸送御用にて派遣となった。千秋丸乗組の軍艦方は、鈴藤勇次郎、荒井郁之助、力石太郎、甲賀源吾である。出発は 12 月 28 日、田子浦に 1 ヶ月、再び出て暴風雨のため紀州大島に入りここに 1 ヶ月、父島二見到着は文久 2 年 4 月 1 日、そして江戸帰府は 4 月 21 日。千秋丸は 263 トンの帆船で、その小笠原行は難航であった。これらについては、石橋通彦「甲賀源吾傳」に詳かである。なお矢田堀景藏に手記「南嶋日録」がある由。

また、文久 2 年は郁之助にとって忘れ難い年となった。すなわち、この年の夏麻疹流行して、郁之助の長男左衛門(当時 3 才)と、続いて父清兵衛を奪った。郁之助は一旦父の跡役を願うこととしたが、勝麟太郎(当時軍艦奉行並)の尽力によって同年 9 月軍艦操練所頭取を被命し、生涯の進路を海軍と決した。時に 27 才。

その直後の 10 月 13 日、幕府は英国より蒸気船ジッキを購入、松平春嶽によって順動丸と命名し、郁之助その船長となる。順動丸は 405 トンの外車鉄船、これが幕末に演じた役割は興味深い挿話をなしている。

当時幕府は開港諸条約の勅許を得るに苦慮しつつも、勅使には攘夷奉承を奉答し、將軍家茂上洛の事態に立至っていた。その後、文久 2 年末より翌 3 年にかけて、幕府の要人は相次いで京都へ入ったが、それにはしばし

は海路がとられた。例えば、文久2年12月16日老中格小笠原長行は、外国奉行菊地隆吉、目付松平信敏、軍艦奉行勝義邦、軍艦頭取矢田堀鴻（景藏）等を伴って江戸を出発、海路順動丸で攝津、播磨、和泉、紀伊を巡回し、翌3年正月13日入京した。次いで松平慶永は正月22日発、2月4日入京で、同じく順動丸によつた。將軍家茂は2月13日発、陸路3月4日の入洛であるが、海路の予定を変更したものであった。しかし、入洛後の4月23日家茂は攝海巡檢を順動丸によつている。翌々日25日、堂上公郷姉小路公知も同じく攝海を巡つた。何れも勝が同乗し、記事は「海舟日記」に見えている。そして6月13日、將軍家茂は老中水野忠精、同板倉勝靜を従えて、海路再び順動丸によつて東帰、江戸着は同16日である。周知の如く、この時家茂入洛の目的はすべて水泡に帰し、かえつて讓夷期限を5月10日（文久3年）と奏上する破目となり、関門事件に連なるのである。

將軍上洛といえは幕府未曾有の大事であつた。また、その東帰を初めて海路によつたことは、海上交通が徳川封建制崩壊の一因子だつたとすれば、既にして時代の推移を語るものである。田辺太一の碑銘に、「斯時に方り、国家多事にして大官の往来軍機の運輸率ね海路による、而して君は順動丸船長となり善く之を監理す」とある。

引続き、時勢を示すバロメーターの如く、順動丸は東西に動いた。文久3年2月、郁之助は父の跡役を木村薫平に継いだ。家督相続も田辺太一名代で済した。

所で、この頃郁之助は、突然講武所取締役に転じ、また歩兵指図役に選つているのが見られる。碑銘にはこれを文久3年とし、傳記にはその翌年の元治元年（1864）4月としている。按ずるに、その月が若し4月だとすれば、元治元年4月であろう。恐らく、この移動は、文久3年8月18日の政変によるものであつて、この推測が正しいならば、文久3年8月以降元治元年始めに至る間と思われる。傳記に

「4月不意に講武所取締役被命、同時に矢田堀は大砲組頭、郁之助と同役の件鉄太郎は開成所取締役（中略）、海軍の技術を以て生涯の業となさんものと思ひおたる身のはからず講武所の取締役たらんとは如何なることにやと心も茫然として失望極まりなかりし」

生涯の進路を海軍と決してより僅かに2年、郁之助の心事察すべきである。なお、元治元年11月には禁門の変により、勝麟太郎御役御免寄合仰付となつている。

慶応元年（1865）7月、歩兵指図役頭取被命。慶応3年春の仏蘭西陸軍傳習では「横浜太田村陣屋を以て傳習所とす、この年の各私人教師來着、当時大島圭介と同室にて、夜は共に教師メッソー氏を訪うて訓練の号令を日本語に直し、練兵の余暇に生兵訓練書を作りたり」と傳記にある。ここに大島圭介と知つた。

この間、勝は長州再征に際して軍艦奉行再勤となり、休戦交渉に當つた。甲賀源吾は奇捷丸船將となつて、瀬戸内を往来、同3年11月、海軍傳習所（英人によるもの）生徒取締りとなつた。そして、同12月28日は江戸蘆州藩邸焼打であるが、陸軍奉行より事前に相談をうけた荒井郁之助、大島圭介は、「至急可然旨」答えたという。鳥羽伏見戦の導火線である。

幕府脱走海軍の品川拔錨は、明けて慶応4年8月19日。この時江戸は既にして東京となり、翌9月は明治改元である。

碑銘に「8月朝旨徳川氏の後を立て、地を駿遠二州に賜ひ70万石に封ず、君、主將榎本釜次郎と議りて曰、地小にして以て8万騎を養うに足らず、因つて遠く蝦夷に赴き、墾拓を務め、兼て北門の鎮たらんと欲す」と。郁之助時に33才。

筆者は、敢てここにその名目を是非するものでない。郁之助は、この時、勝麟太郎の妥協を排した。また、恭順を是とする叔父矢田堀景藏と袂を分つた。これらは、後年、榎本釜次郎、大島圭介らと必ずしもその道と同じうしなかつたことと軌を一にするものであろう。荒井郁之助の眞面目がここにある。筆者は斯様考へる。何故なら、人は何れは自らに立戻らざるを得ないから。——

* * *

資料不足のため、筆者は上記を以て一応この略傳を打切るが、郁之助の其後について、なお一、二を追記して本文を補足したい。

郁之助は明治5年赦されて開拓使出仕となり、英和辞典を印行した。すなわち明治5年壬申七月開拓使版「英和对訳辞書」である。その序に、

「天候の寒暖は山海の向背土地の高低に關すること少からずと雖（略）北海道及び柯太の地若し北緯42度より起りて55度に至れば本州より頗る五寒を覺ゆ然れども之を歐州北方の諸國に比すれば、猶暖帯に近とす是を以て之を考ふれば北海道開拓の業未だ功を奏せざる所以は人智開けずして學問の進歩遠く彼に及ばざるを以てなり」

この故に「學校を札幌府に建、専ら人村を育し百工を勤めん」がため、この辭書を編したと云う。

また、碑銘に「女學校を創め、女子をして海外に留学せしむ」とあるは、芝の開拓使女學校である。その主旨は、開拓には植民が必要であり、植民には女子の教育が先じなければならぬ、というにある。

上記辭書が獄中早くも編まれたことを思えば、當時既にして、再び身を軍艦に置くことをしない決意が為されていたのではあるまいか。そして、郁之助は生涯その決意をまげなかつたもの如くである。

氣象台に關連し一言述べれば、郁之助が内務省地理局測量課長となつたのは、明治10年の行政改革直後。當時の所謂東京氣象台（創業明治8年6月）は測量課の掛、主任正戸豹之助以下計4名が拜務取扱だつたに過ぎない。だが、当初大半を占めたその測量事務が、明治17年陸軍參謀本部に移されるに際し、郁之助は氣象台に残つた。そして、視測網の整備、暴風警報天気予報の創始、中央氣象台官制公布を経て、氣象事業体制の一応なるや、直ちに辭表を呈している。まことに、その進退は達人のものである。

人の生涯には、狂ほしく花咲き満る如き一時期があるといわれる。荒井郁之助にとって、江戸灣脱走より五稜郭決戦までがあるいはそれに當るかも知れない。しかしながら、恐らく、その青年時代にこそ一生の総てがあろう。たとえそれが可能の形においてであらうと。

（1955, 6, 23, 高層氣象台）